

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐県海士町海士
電話2-9772

海士町の取組紹介

あまサマーキャンプ （かつての参加者が運営へ、島の 中で循環する未来のカタチ）

御波地区での開催二年目

を迎えた今年度のあまサマーキャンプでは、地域に根ざした新たな試みに挑戦しました。最大の変更点は、子供たちの活動に自律的な「余白をつくるため、日程を従来の三泊から四泊へと増やしたことです。時間にゆとりを持たせることで、仲間と深く関わり合う環境をデザインしました。また、これまでのいかだレースに代わり、地域の伝統文化の伝承と住民交流を意識した「かんこ舟レースを導入。地域の方々に温かく見守られながら共に汗を流す、豊かな時間を創出しました。この熱い四泊五日の中で、小学五年生から中学三年生までの参加者二十四名は、見違えるほどたくましく成長

しました。最初は海で泳げなかった子が泳げるようになったり、異年齢の縦割り班の中で助け合いながら絆を深めたりと、スケジュールに「余白」があったからこそ、子供たちは、主体的に動き、確かな成果を掴み取ってくれました。

そして何よりも一番の成果であり、大きな喜びとなったのは、かつてこのキャンプの参加者だった地元の高校生二名が、今年は運営スタッフとして戻ってきてくれたことです。派遣社会教育主事として、次世代を育成するためには、地元出身の高校生を動かすことが大事だと考えていました。当初は、町の方針である「還流」を促すための新しい事業や組織を立ち上げなければならぬと思案していました。しかし、あえて新設せずとも、ずっと大切に続いてきた既存の事業の中にこそ「かつての参加者が運営側になる」という次世代の育成のサイクルが隠されていたのです。海士町の

「ないものはない」の精神のとおり、外から新しいものを付け足さずとも、私たちが未来へ繋ぐべき大切なものは、すでにこの島の中にあつたのだと深く実感しています。更に嬉しいことには、今年の参加者の中からも「来年は自分がスタッフとして関わりたい」という声が上がリ、早くも次の世代へ思いを受け継ぐ新しい波を感じています。この縦のつながりの中で育まれた島への愛着や誇りこそが、子供たちが一歩社会へ踏み出した先で、町が目指す「いつかまたこの島に帰って来たい」と思える真の還流へ繋がっていくものと期待しています。（池田高理）



海士町の三校の取組

海士町の小中学校三校は、校内研究に積極的に取り組んでおり、来る十月三十日の隠岐教育研究会海士大会に向けて準備をしております。今回は三校の特徴的な取組についてお知らせします。

【福井小学校】 ○ やつかタイム



やつかタイムは、児童が内発的動機づけをもって主体的に学習等に取り組めるよう、探究的な学習に重点を置いた時間として設定されています。児童は、木曜日の午後に七十分一コマで「自分の成長につながる」やりたいことを校内の様々な場所で行い組みます。教師は児童のやりたいことにとことん寄り添い、児童の成長につながるように助言します。児童の取り組み内容は、児童の追うごとに高まっており、やつかタイムでの学習が児童にとって価値あるものになりつつあります。

【海士中学校】
○ プロジェクト（PJ活動）
海士中学校には目指す人間像をもとにプロジェクトチームが三つあります。そのうちの「たくましく成長しようとする人間チーム」では、「66（ろくろく）チャレンジ」という取組を行っています。この取組は、人が物事を習慣化するためには六十六日間かかるという校長講話をもとに、なりたい自分になるための行動をその期間続けていこうとするものです。海士中学校のだんだんホールには、生徒の笑顔の写真と共に66チャレンジでどんなことに取り組んでいるかが掲示されています。そこには生徒だけでなく教師のチャレンジも掲載されており、子供も大人も同じ目線で頑張っているという思いが感じられます。海士中学校にお越しの際は、ぜひこの掲示を探してみてください。（福山貴司）



【海士小学校】 ○ マイスタディ（複線型授業）



マイスタディは、海士小学校が校内研究において主に取り組んでいる「児童の主体的な学習」を促す取組の一つです。単元内の数時間、あるいは一単位時間の中で、児童が問いに向かって自分で学習の方法や場所等を選択します。教師は児童が自分で学べるような環境を準備した上で、学びの様子をよく観察し、必要な支援を行ったり、敢えて手を貸さずに見守つ

心に残る言葉

私事ですが、最近特に本や映画、テレビなどで心に残る言葉が増えてきたと感じています。自分が様々な経験を積んできたから分かるようになったのかも知れません。一つ紹介します。



煉獄杏寿郎の母の言葉
「なぜ自分が人よりも強く生まれたのか分かりますか。弱き人を助けるためです。生まれついて人よりも多くの才に恵まれた者は、その力を世のため人のために使わねばなりません。天から賜りし力で、人を傷つけること、私を肥やすことは許されません。弱き人を助けることは強く生きた者の責務です。責任をもって果たさなければならぬ使命なのです。」
『鬼滅の刃』吾峠呼世晴／集英社 第八巻

漫画の中の言葉ですが、私は最近のニュースの大人と子供との関係を重ねてしまっています。教員を含む大人から子供たちへの性暴力も多くの報道されており、煉獄さんの母が聞いたら悲しまれるだろうと考えてしまいます。なぜ大人が子供たちを守り、育てなければならぬのか。それはこの母の言葉の中にあります。「子ども性暴力防止法」が十二月に施行されます。大人が協力して子供たちを守る責務を果たせるよう、学校関係職員はどうやって守るかを研修し、子供たちの笑顔あふれる学校づくりを進めていきたいです。（新谷慎太郎）